

埋文群馬

MAIBUNGUNMA



埋文群馬No.63 目次

● 最新レポートⅠ

金井下新田遺跡

ー「勾玉の古墳人」と上屋構造がわかる平地建物の発見ー

岩上千鶴…… 2

● 最新レポートⅡ

西宮遺跡 ー江戸時代の建物跡 建築部材の発見と機織り具ー

宮下 寛・石田 真・関 明愛・飯田陽一…… 4

● いま、地域が見えてくる 1

前畑J遺跡 ー発見された縄文時代の遺構群ー

飛田野正佳…… 6

● いま、地域が見えてくる 2

万木沢B遺跡

縄文から弥生へ ー二つの文化が融合した大型溝の調査ー

関口博幸…… 8

● いま、地域が見えてくる 3

T 007 遺跡 ー古墳時代終末期の葺石を持つ方墳の発見ー

小原俊行……10

掲示板・表紙の写真解説



かないしもしんでん 金井下新田遺跡 (渋川市金井)

「勾玉の古墳人」と上屋構造がわかる平地建物の発見

主任調査研究員 岩上千鶴

1 平成29年度発掘調査の概要

金井下新田遺跡は国道353号金井バイパス(上信自動車道)建設工事に伴い、渋川土木事務所から委託を受けて平成29年4月から9月にかけて発掘調査をしました。今年度の調査では、金井東裏遺跡に隣接する1区と、囲い状遺構が発見された4・5区間の6区の調査を行いました。今回は1区の調査概要をレポートします。

6世紀初頭と中頃、榛名山の2度にわたる噴火によって噴出した軽石、火山灰及び火砕流堆積物の厚さは2～3mに達しました。古墳時代の人々の生活した痕跡は、約1,500年間の眠りにつくことになりましたが、発掘調査で明らかになった噴火直前の景観は、数多くの貴重な情報を現代に伝えています。

2 現れた! 「勾玉の古墳人」と平地建物

6世紀初めの榛名山二ツ岳の噴火では、15回の噴火が起こり、古い順にS1～S15の番号が付けられています。最初の2回の噴火はマグマ水蒸気爆発で、火山灰(S1、S2)が降下しました。火山灰を踏み込んだ多数の人の足跡や馬の蹄跡が見つかったことから、この噴火の直後に、古墳人たちは馬を連れて移動していたことが分かりました。その後、火砕流(S3、S7)が発生し、北西方向から流下しました。この火砕流は時速100kmを超えていたため、これに巻き込まれ押し流された人や馬がいました。また、建物も倒壊して一面が火砕流堆積物に覆われました。

そのため、1区ではS3に巻き込まれて竪穴住居の窪地に流された古墳人が、首飾りを着けたままの状態で見られました。残存状態が良かった1号平地建物、4号平地建物(鍛冶遺構)を含む6棟の平地建物もこの火砕流堆積物の下から検出されました。

(1) 「勾玉の古墳人」

「勾玉の古墳人」は昨年度「3号金井馬」が出土した6号竪穴住居の火砕流堆積物の中で、発見されました。6号竪穴住居は、一辺の長さが約6m、

床面から周堤頂部までの高さが約1.2mで、S1降下時にはすでに廃絶されていました。付近からは足跡や蹄跡が数多く見つっています。多くの人や馬が移動をしている中、火砕流(S3)に1人と1頭が流され廃絶された竪穴住居の窪みに流れ落ちたと考えられます。古墳人は住居のほぼ中央部、床面から40cmほど上の位置で確認されました。土の色の違いから頭部の輪郭がわかり、さらに、上前歯、首飾りの一部、上腕と大腿の骨が残っていたので、左半身を上にして西側を向いていることがわかりました(写真1)。なお、「金井3号馬」は古墳人の西隣で見つかり、古墳人同様に左半身を上にして脚を西に向けて横たわっていました。

「勾玉の古墳人」の性別は不明ですが、歯の咬耗



写真1 「勾玉の古墳人」の全身像(西から)
画面左の卵形の輪郭が頭部



写真2 勾玉の首飾り出土状況(南から)
画面左から ガラス玉・勾玉・ガラス玉・勾玉・ガラス玉・
勾玉・ガラス玉・勾玉・石製管玉の順
首飾りの左上は上前歯

状態から年齢は10代と推定され、身長は現地の実測では145～150cmと判明しました。

首飾りは、勾玉、ガラス玉、管玉が規則的に連なっており、装着している様子が具体的に分かる貴重な発見になりました(写真2)。

(2) 1号平地建物

火砕流(S7)を取り除いていくと、炭化材が大きな塊となって現れました。さらに、1辺の長さが約4mの方形で固い床面と、その内部に柱を建てたピットが確認できました。炭化材は壁や柱、屋根を構築する材料で、当時の平地建物の姿を復元できるほどしっかりと残っていました。

発見当時の様子から、多くのことが分かりました。まず、床面にS1、S2が堆積せず、屋根の材の上に堆積していたことから、S1、S2降下時にこの建物は建っていたということです。次に、この建物はS3によって倒されたことです。S3の一部は屋根炭化材の下に潜り込むように堆積していました。S3は、平地建物を強い流速で押し倒しました。その衝撃で屋根を南東方向へ吹き飛ばしました。その結果、建物内に潜り込み堆積したと考えられます。

また、この建物の炭化材(写真3)が、原位置から南東方向に3m程度ずれて出土したことから、S3は遺跡の北西から流れてきたことも分かりました。炭化材の残りがここまで良かったのは、S3により屋根材が押し倒された方向から蒸し焼きの状態になり炭化して、その後に襲ってきたS7火砕流によってパックされたためです。

この炭化材から、1号平地建物の構造は寄棟造で、棟木、母屋、又首、桁、垂木からなっていることが判明しました。壁は二重構造で、外側は篠



写真3 1号平地建物（東から）
炭化材右上の濃茶色が床面 矢印は火砕流の方向

のような材を網代状に編み、内側は同じ材を縦に組んでありました。現在のパネル工法のような形であったようです。入口は、人の足跡の動線から建物南側にあり、長さ30～40cm四方の平石が置かれていました。入口付近には、縦60cm、横20cm程の板材を2枚確認しました。その形状や出土状況から建物の扉であったと考えられます。

(3) 4号平地建物(鍛冶遺構)

4号平地建物は、床面から鉄滓が出土しました。金床石、炉等が作業手順通りに配置されたまま見つかりました(写真4)。このことから、建物内で鍛冶を行っていたことが判明しました。古墳時代の平地建物での鍛冶遺構は、これまで発掘報告が無く国内初の発見となりました。建物の規模は東西3m、南北2.5m程で、床面の調査では、作業場とやや高くなったベッド状スペースに区画して使用された痕跡が確認できました。入口はやや低くなった南側にあったと考えられます。また、柱穴が見つからなかったことから、平地建物は、深い柱穴を持つ建物と簡易的な溝のみで建てられた2種類のもが存在していたことが分かりました。



写真4 4号平地建物(鍛冶遺構)(東から)

3 おわりに

「勾玉の古墳人」と「平地建物」の発見は、一瞬で奪われた古墳時代の人々の生活を呼び覚ます、大変貴重なものとなりました。今後は、「勾玉の古墳人」の頭蓋骨の骨格、首飾りの全体の解明が期待されます。また、今後も発掘調査は継続されます。さらに金井東裏・金井下新田遺跡における古墳社会の実像が明らかになっていくことへの期待に胸が膨らみます。

にしみや 西宮遺跡 (吾妻郡長野原町川原畑^{かわらはた})

江戸時代の建物跡 建築部材の発見と機織り具の出土

主任調査研究員 宮下 寛・主任調査研究員 石田 真・調査研究員 関 明愛・専門調査役 飯田陽一

1 はじめに

西宮遺跡は、八ッ場大橋の西側、吾妻川左岸の河岸段丘上の緩傾斜面に位置します。八ッ場ダムの建設工事に伴い、平成20・26年に発掘調査を実施し、天明三(1783)年の浅間山の噴火による吾妻川の泥流で埋没した屋敷、畑、道などを発見しました。昨年度は、旧JR吾妻線南側の調査区において泥流直下の畑、吾妻川まで延びる道、泥流後の復旧溝群などを調査しました。今年度は、これまで確認した屋敷の隣接地を調査し、泥流で倒壊した建物群の建築部材とともに、被災直前まで使用していた生活道具など貴重な遺物が大量に出土しました。今回は新たに発見した建物と、出土した主な遺物を紹介します。

2 天明泥流直下の建物群と道路

西宮遺跡では、泥流によって埋没した、母屋建

物5棟、付属建物7棟、井戸、畑、道などを調査しました。調査区内には、諏訪神社や宝篋印塔から三ッ堂方面に至る東西方向の町道があります。この町道を境に、南側では母屋建物3棟と付属建物4棟(写真1)、北側では母屋建物2棟、付属建物3棟がみつかりました。傾斜地を造成して石垣や水路を築き、礎石建物や掘立柱建物を建てていました。建物は東西棟で、南側の玄関から入ると土間の西側か東側に馬屋が、奥にカマドや洗い場などがあります。複数の囲炉裏をもつ建物もありました。唐白のあった建物では、支柱は残っていましたが、唐白は抜き取られていました。災害後に家主が建物から必要な生活道具などを掘り出していたと考えられます。建物には、倒れた土壁、柱、床板などが、被災当時の状態で残っていました。建築材が湧水によって長期間水に浸かり、良好な状態を保っていたのです。床板に敷かれた



写真1 江戸時代の建物跡全景(西から) 奥に見えるのが八ッ場大橋

奠座^{とぎ}や礎^{むしろ}の一部も確認することができました。床板の下には大引きや根太といった建物の土台となる構造物が残っていました(写真2)。また、礎石の一部には、墨書で上下二段に数字を記したものがみつかりました。これは梁方向と桁方向の柱筋番号を記したものとみられます。付属建物には、直径約80～90cmの大型の桶2基を付設し、桶にかけた踏板や内部に大型の柄杓^{ひしやく}が残るものもあり、これらは便所とみられます。

現町道下の調査では江戸時代の道を確認しました。この道は幅約1.8mの規模で、地域の幹線道路とみられ、石垣によって補強され、排水用の溝が掘られていました(写真3)。この道から屋敷や畑の方向へ分岐する道もありました。天明泥流によって埋没した後も、ほぼ同じ場所に道を再建していたことが分かります。

3 建物から出土した遺物

日常生活で使用していた道具が建物内から大量に出土しました。竹製の籠に入れた漆塗りの椀、曲げ物、竹筒に入れられた箸、お櫃、硯箱、木箱、櫛、下駄などの木製品をはじめとして囲炉裏の上



写真2 江戸時代の建物群の調査風景(北西から)



写真3 江戸時代の建物群と幹線道路(南東から)

に置かれたヤカン、鉄鍋、包丁、キセル、銭、柄鏡、矢立などの金属製品や陶磁器の碗や皿類などが出土しました。

今回の発掘調査で特筆すべきは、織布を製作するための機織り具である地機^{じはた}の部品が出土したことです。経糸の間隔を調整するための箴^{たていと}(写真4)や経糸を固定するための経巻具^{たてまきぐ}(写真5)が出土しました。出土した大量の木材の中には他にも地機の一部が含まれている可能性があります。この地域でも、女性の日課のひとつに機織りがあったのかもしれない。



写真4 障子の棧^{さんざん}と織機の一部である箴^{たていと}



写真5 建物から出土した経巻具^{たてまきぐ}

4 まとめ

天明泥流で埋没した建物の下層から、より古い時代の建物も1棟みつかりました。この建物にも馬屋、カマド、囲炉裏などがありました。また、畑の下層から一部では水田の跡がみついています。これまでの発掘調査による成果とともに、今年度の新たな発見によって、江戸時代の西宮遺跡の集落の様相がさらに解明されつつあります。

いま、地域が見えてくる 1

まえはた 前畑 J 遺跡 (桐生市新里町野^の)

発見された縄文時代の遺構群

専門調査役 飛田野正佳

1 平成29年度発掘調査の概要

前畑 J 遺跡は一般県道笠懸赤堀今井線の道路改良工事に伴い、群馬県桐生土木事務所からの委託を受けて、発掘調査された遺跡です。遺跡は「野」の交差点の拡幅工事区間にあり、交差する道路区間により、1区・2区・3区として調査を行いました。調査期間は、平成29年9月から11月の3か月間で、面積は約2,485㎡です。

遺跡地は微高地(台地)上にあり、粕川・藤川・早川などととも赤城南麓を流下する鍋木川の支流が形成した小支谷(低地)に面しています。現在、低地部では水田、台地上には集落が広がり、古くから人々が住みやすい環境であったようです。

今年度の調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構と遺物が、数多く発見されました。ここでは、縄文時代の遺構と遺物の概要を紹介します。

2 発見された縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

縄文時代の遺構は、すべての調査区(1~3区)で発見されていますが、交差点部分を中心に分布していました。遺構は、竪穴住居6棟、竪穴状遺構3基、屋外炉1基、土坑77基のほか、多数のピット群(小さな穴)があります。この内、竪穴状遺構や屋外炉(写真3)については、住居の可能性が高いため、住居とみなせる遺構は10棟となります。

確認できる竪穴住居の形状は、円形もしくは円形に近い隅丸形状のもので(写真1・2)、住居内の壁際に柱穴と思われる小ピットが不規則に並んでいることが確認できました。炉跡が確認できたのは、15号住居と屋外炉のみで、他は調査区外であったり、土坑等に壊されたものと考えられます。9号竪穴住居(写真2)は、床面が二段に構成される特異な構造でした。



写真1 2区14号竪穴住居(西から)



写真2 1区9号竪穴住居（南から）



写真3 2区1号屋外炉（南から）

土坑とは、縄文時代の人々が何らかの目的のもとに地面を掘り込んで作る、ピットより大きめの穴をさします。前畑J遺跡からは、円形や楕円形のものが多く発見されています。深さは浅く断面の形状が丸底のもの、深く掘り込まれ断面形状が垂直のものや底面に近くなるとフラスコ状に広がる形状のものなどがありました。98号土坑(写真4)は、底面外縁に細い溝が巡る珍しいものです。

ピットは、直径15～30cm程の円形状の掘り込



写真4 2区98号土坑（東から）

みで、主に柱穴などと想定できますが、構築物を確定できるものではありませんでした。

(2) 遺物

縄文時代の遺物は、前期～後期の土器・石器類です。前期の土器は、諸磯式とよばれる形式の土器を中心に竪穴住居から出土しています。写真5は、同時期の浮島式土器と思われます。中期の遺物としては、勝坂式期や加曾利E式期の土器が多く、屋外炉の炉体土器は加曾利E式期のものでした。土坑出土の土器は、中期のものが多い傾向にあります。後期の土器は、注ぎ口が二つある双口注口土器(写真6)が注目されます。



写真5 1区2号竪穴状遺構遺物出土状況



写真6 3区69号土坑遺物出土状況

3 まとめ

前畑J遺跡の調査では、縄文時代のみならず、多くの成果が上げられました。これまでに前畑遺跡は、桐生市教育委員会によって、数回にわたって発掘調査が実施され、そこでも多くの成果が得られています。これらの成果を踏まえながら、地域の原始・古代社会の実像に迫り、地域史の解明の一助になればと考えています。

いま、地域が見えてくる 2

まんぎさわ 万木沢 B 遺跡 (吾妻郡東吾妻町三島)

縄文から弥生へ 一二つの文化が融合した大型溝の調査一

主任調査研究員 関口博幸

1 はじめに

万木沢 B 遺跡は建設が進む八ッ場ダムの約 8 km 下流の吾妻川右岸側、JR 吾妻線矢倉駅の南方約 450m の位置にあります。標高は約 420m、吾妻川の段丘崖と万木沢川の深い溪谷で画された平坦な下位段丘面に立地し、吾妻川を挟んで対岸には岩櫃山の断崖が雄大に聳えています(写真 1)。

周辺には奈良三彩短頸壺が出土した四戸遺跡や遮光器土偶が出土した唐堀遺跡、対岸の岩櫃山には山頂部に弥生再葬墓の鷹ノ巣遺跡、中腹に岩櫃城跡、麓にハート形土偶が出土した郷原遺跡など著名な遺跡がたくさんあります。

遺跡は上信自動車道吾妻西バイパスの建設工事に伴い平成 29 年 4 月～ 11 月に発掘調査し、主に平安時代の畑跡、古墳時代から平安時代の集落跡、縄文時代から弥生時代の大型溝と土坑が検出されました。ここでは多種多様な遺物が大量に出土した大型溝の調査について紹介します。



写真 1 遺跡遠景 (奥は岩櫃山、南から)

2 大型溝の調査

大型溝は、幅約 7～8 m、長さ約 40m、半円形状を呈して万木沢川に近い遺跡東端部で検出されました(写真 2)。時期は縄文時代晩期で、古墳の周溝とよく似た形状から人工的に掘られた遺構で、土偶や岩版などこの時期特有の特殊な遺物が出土する可能性を想定して調査を開始しました。

するとすぐに夥しい数の土器や石器、礫が全面から出土しはじめました(写真 3・4)。溝の深さ



写真 2 大型溝の調査風景(西から)

は 1 m ほどでしたが、上から下まで途切れることなく出土する遺物を写真と図面に記録して取り上げ、また掘っては記録・取り上げという作業を何回も繰り返してようやく底に到達しました。途中には再葬墓と思われる土器も検出されました(写真 5)。春から開始した調査も完掘の時には秋も深まり、岩櫃山が紅葉に包まれていました。

一方、人工的な遺構か否かの検討も進めました。その結果、最下層が砂と角礫で構成された無遺物層で、この上に遺物包含層の黒色土が堆積していました。最下層の砂は明らかに水流の痕跡で、水流が停止してから遺物包含層が形成されたといえます。また、人工的に掘られたなら、その時の排土が大量に残っているはずですが、全く確認できませんでした。さらに、大型溝は東から南へ方向を変えて調査区外へと延びていくことも判明しました。

こうして大型溝は人工的に掘られた遺構ではなく自然の溝、つまりもともと半円形をした自然の小川で、水流が止まって窪地になったところに大量の遺物が廃棄されたと判断しました。しかし、大型溝は単なる遺物廃棄場所ではなく、小川の水流を意図的に止め、特別な行為を行う場所として利用した可能性が浮かび上がってきました。

3 大型溝から出土した多種多様な遺物

大型溝からは、大量の土器や礫のほか、石鏃、石錐、尖頭器、打製石斧、磨製石斧、磨石、凹石、

台石、砥石、石棒、石剣、勾玉・管玉・丸玉などの玉類、骨片、炭化物、そして土偶など実に多種多様な遺物が多数出土しました。土器は縄文時代晩期から弥生時代前期のもので、県内では類例の少ない弥生前期の土器が主体を占めていました。

玉類には精巧に穿孔された碧玉製の管玉、ヒスイ製・蛇紋岩製の勾玉、丸玉、また未成品や残滓類もありました。打製石斧には大型の石鏃もあり農耕の存在を暗示します。石棒や石剣はいずれも割れていて完形品はありません。石鏃は600点以上、ほとんどが黒曜石製の有茎鏃で大きさは概ね1cm程度、製作に伴う膨大な量の黒曜石製の素材剥片や石核、調整剥片類も一緒に出土しました。



写真3 遺物出土状態（北から）



写真4 遺物出土状態



写真5 再埋葬の検出状態

4 土偶の発見

調査が中盤に差しかかったころ、期待していた土偶がついに出土しました。最初に出土した土偶は肩部の破片、10cmほどですが中空のつくりで本来の大きさは遮光器土偶に匹敵する大きさだったと思われます(写真6)。その後も脚部や胴部(写真7)、頭部の破片の出土が相次ぎ、調査の終盤には頭と腕の一部が欠けていたものの完形に近い人形の土偶も出土しました(写真8・9)。

最終的に10数点の土偶を確認しました。いずれも頭部や脚部、胴部、腕部などの破片で、同一個体のものはほとんどなく、それぞれが別個体です。バリエーションに富んでおり、少なくとも8



写真6 土偶（肩部）



写真7 土偶（胴部）



写真8 土偶（人形）



写真9 土偶（人形）

個体以上の土偶が存在した可能性があります。また、同一個体の破片があまりにも少ないことから、大型溝で土偶を壊したのではなく、他の場所で壊して破片の一部を持ってきて廃棄したと思われる。土偶が破片で出土した状態は一般的な縄文時代の出土例と同じで、石棒や石剣も破片でした。

5 おわりに

祭祀に関連する土偶や石棒、石剣、玉類が廃棄されていたことや再埋葬が残されていたことから、大型溝は祭祀が行われた特別な場所だったと考えられます。ここで祭祀を行った理由には、やはり岩櫃山の景観に関連があるはず。岩櫃山の荘厳な断崖を見上げ、人々は祈りを捧げていたのではないのでしょうか。

また、大型溝からは弥生前期の土器や精巧な管玉、石鏃など弥生の遺物と土偶や石鏃、石棒など縄文の伝統を色濃く残す遺物が一緒に出土しました。それは最後の縄文文化と最新の弥生文化が融合した遺物群といえるでしょう。

大型溝が形成された時期はおおよそ2,500年前の縄文時代から弥生時代への過渡期、それは一万年以上続いてきた縄文の狩猟採集生活から弥生の農耕生活へと生活基盤が変化していく時期にあたります。大型溝で祭祀を行い多種多様な遺物を残していった人々は、伝統的な生活を続けながら新しい弥生文化を取り入れて社会の変化に柔軟に対応していった吾妻川中流域における最後の縄文人だったのかもしれない。

今後の資料整理でこうした仮説を検証し、吾妻地域における当時の人々の暮らしぶりや縄文文化から弥生文化への変化の様子を実証的に解明していきたいと思えます。

T007 遺跡 (富岡市後賀)

古墳時代終末期の葺石を持つ方墳の発見

専門員 小原俊行

1 遺跡の立地と調査経過

T007 遺跡は、富岡市後賀地内に所在する遺跡です。この遺跡は鑄川左岸にあり、鑄川の支流である星川の河岸段丘上に立地しています。周辺部には古墳が比較的多く築かれており、北方500mには、現在は削平により消滅した後賀土橋遺跡どぼし小町塚古墳(円墳。規模不明。)がありました。また、鑄川の対岸には西大山遺跡の古墳群が存在しており、平成7年度に甘楽町教育委員会が、墳丘径10m前後の円墳を3基発掘調査し、円筒埴輪、馬具等が出土しています。

今回、富岡土木事務所から委託を受けて、平成29年度補助公共社会資本総合整備(広域・栃木長野)(一)下高尾小幡線庭谷工区に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行いました。その結果、この遺跡には複数の古墳が存在すること、その中の1基が7

世紀代の葺石を伴う方墳であることが判明しました。

現在、群馬県内において古墳時代終末期の葺石を伴う方墳は、前橋市総社古墳群の蛇穴山古墳、宝塔山古墳、愛宕山古墳、太田市の巖穴山古墳など、数例に過ぎません。本遺跡の古墳群は、昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』にも記載がされていませんでした。そのため、今回の調査によって県内で数少ない貴重な事例が新たに発見されたこととなります。

2 7世紀代の葺石を伴う方墳

本遺跡では現時点で、10基の古墳を検出し、いずれも葺石を伴うと推測しています。しかし、どれも墳丘の上部は後世の耕作等によって削られていました。



写真1 T007 遺跡7号墳の正面(南から)



写真2 T007遺跡7号墳（上空から）

（1）葺石を伴う方墳である7号墳

これらの古墳のうち、7号墳は葺石を伴う方墳であることが判明しました(写真1・2)。7号墳の範囲が調査区外にも及ぶため、不明確なところもありますが、墳丘の裾部の長さが1辺につき約30m近くあると推定されます。また、墳頂部は大規模な削平を受けており、石室の主体部やその痕跡は検出されませんでした。

7号墳の葺石の特徴として、通常は葺石をしない古墳周溝部の底部から葺石を設置していることがあげられます。また、人の頭ぐらいの大きさの円礫を用いて約2mごとに墳丘斜面を区画し、その後、区画内に石を充填して行く工法が用いられていること、葺石の一番下の段には、他より一回り大きめの礫を設置して、根石としている状況などが認められました。なお、これらの葺石は鑄川流域で採取されたものを用いていると考えられます。

北面や東面の墳丘では、葺石が崩落した箇所が複数認められました。崩落石の一部には、元の葺石の配置と重複する形で積み上げられたものもあったので、後世の補修などで積み直されたものも含まれていたと考えられます。

これとは対照的に、正面である南面の葺石は比較的丁寧に積まれていたためか、良好な状態で残存していました。墳丘の南面の葺石の一部では、径約80cmの三角形の大形の礫を用いるなど、意匠と思われる特異な配置が認められました。

墳丘の各段には、葺石が設置されていない平坦な箇所が帯状に認められました。この面では、大きさが直径5～8cmぐらいの礫が多く認められたことから、砂利が撒かれたテラスと考えられます。

周溝は、墳丘の周りを方形に囲うように掘り込まれていました。周溝の覆土の最上面には1108

年に降下した浅間B軽石の堆積層が認められています。周溝の北側では、より古い時期の古墳の一部が削られている状況が認められました。また、正面に当たる周溝の南側では、凝灰岩と思われる礫が覆土中から大量に出土しました。

（2）T007遺跡の成果と今後

主体部が削平されていたため、副葬品などから築造時期を特定することが困難ではありますが、葺石を伴う方墳であることから、7号墳の築造は、古墳時代終末期である7世紀代と考えられます。当時の葺石を伴う方墳は県内では数少なく、西毛地域では初の発見例となりました。また、墳丘の1辺が約30mあり、当時のものとしては大型の古墳であるといえます。このため、7号墳に葬られた人は7世紀代の鑄川流域における有力者であったと考えられます。

7号墳以外の遺構の殆どについては、調査期間との関係から今回の発掘調査では、範囲確認作業までとなりました。次回の発掘調査以降、残りの遺構を調査することで、T007遺跡の内容がより明確になると考えられます。



写真3 調査区全景（上空から）



写真4 甘楽地域とT007遺跡（西から）

掲示板

普及課からのお知らせ

1 初めて土偶の野焼きを行いました。

■当事業団では体験学習の一つとして、粘土代を負担していただき、土器の製作と野焼きを毎年開催しています。今年は土偶に挑戦しました。10月が専門職員による「土偶の話」と製作、11月は乾燥期間にあて、12月3日(日)に事業団の敷地で焼きました。初の試みでしたが、意欲的な作品が焼き上がりました。野焼きの様子と、焼きあがった作品の写真を掲載します。平成30年度の野焼きの内容については、現

在計画中です。決まり次第、ホームページなどで広報しますので、ふるってご参加ください。



本焼き直前に並べられた土偶



完成した作品

2 電子メールにより行事案内をお知らせしています。

■当事業団では、年間を通じて展示会や講演会などを催しています。電子メールによるこれらの案内を希望される方は、下記のアドレスより申込みをしてください。

なお、受付時の事務処理上、事業団へ送信していただく電子メールのタイトルは「行事案内希望」とし、本文に郵便番号、住所、氏名、連絡先電話番号を記入してください。



■電子メール送付先

gunmaifukyu@apricot.ocn.ne.jp



※携帯電話アドレスへの連絡を希望される方は、パソコンからのメールが受信できるように携帯電話の設定をしてください。

■事業団のホームページ

<http://www.gunmaibun.org/>

連絡先: 普及課

☎0279-52-2513



表紙解説

T 007遺跡(富岡市後賀) 7号墳の葺石

鎗川に架かる塩畑堂橋を富岡市後賀方面へ渡るとすぐに、「塩畑堂」の交差点があります。T 007遺跡7号墳はこの交差点の北方約50m、現在の道路の西側で見つかりました。墳丘の基壇と盛土部分の下部が残っており、この2段の斜面部の葺石を原位置のまま確認することができました。中でも、基壇南面の葺石は保存状態もよく、人頭大の川原石を横手に置いて、直線に積み上げた石列による葺石の区画線がよくわかります。古墳の造り方については、今後の調査で明らかにする予定です。なお、基壇の葺石の周囲の少し黒っぽく見える部分が、墳丘の周囲を囲む周溝の底部です。



本誌は、一般向けの埋蔵文化財情報誌です。
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課 ☎ 0279-52-2513 までお願いします。

「埋文群馬」No. 63
平成30年3月12日発行
編集・発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橋町下箱田 784-2
☎ 0279-52-2511
印刷 上毎印刷工業株式会社